

未来への種をまく

特集

農業をやる

日本の食を支え、主要産業の礎を築いてきた農業。
しかし、いつしか「休みがない」「重労働で低収入」と
農業のイメージは暗いものになっていきました。
40%を下回る低い食料自給率、
人口の2%に
満たない農家が
日本の食料の大半を
支える時代。
それに加え後継者不足、耕作放棄地の増加、
農業従事者の高齢化と農業の衰退が懸念されている日本。
三豊市も例外ではありません。
農業に、魅力そして未来はないのでしょうか。



みとよんと学ぶ

先手の防災

災害が発生した**その時！**
共助のチカラで減災を目指しましょう。



M's Lesson ⑦

まずは 隣近所への「声掛け」

- ・ けが人や困っている人などが近くにいないか声をかけましょう。
- ・ 災害時に自分の身を守ることが難しい人が、近所にいないかなどを日頃から確認しておきましょう。

火災発生時は「初期消火」

- ・ 大声で知らせ、消火器、バケツリレーなど近隣で協力して初期消火を行いましょう。

住民同士の「救護活動」

- ・ 一刻も早い応急救護が命を救うことがあります。

三豊市の人口

※平成26年9月1日現在 ()内は前月比

世帯数 23,338 世帯(+4) 総人口 66,245 人(-74) 男 31,564 人(-27) 女 34,681 人(-47) ※香川県人口移動調査による

広報 **みとよ** 10月号 目次
平成26年 contents

- 3 特集 農業をやる
- 16 M's Information みとよくらしのおしらせ①
市民対話集会 / 都市計画道路の見直し / 行政相談 /
がん検診・健康診査・高齢者インフルエンザ
- 18 みとよHOT ほっとNEWS(ホットニュース)
- 20 M's Information みとよくらしのおしらせ②
国民年金 / 市営住宅入居者募集 /
オリジナルナンバープレート / 市営墓地使用者募集 / 浄化槽の日
- 24 子ども子育て支援制度 /
幼稚園入園児・保育所入所児募集
- 26 文化祭、みとよ秋のイベント
- 28 粟島のイベント
- 29 M's 深読みひろば
文化財 / 定住
- 30 10月のお知らせ
募集 / 相談 / 講座・教室 / イベント /
納税のお知らせ / マリンウェブ情報 / 国際交流協会
- 33 保健・相談
- 34 ここ笑み通信 ～子育てするなら三豊が一番！～
英語教育 / 水痘予防接種 / 風疹抗体 / 里親制度 /
M's smile ふおとぎやらい / 乳幼児健診 など
- 36 みとよ写真帳 / 編集後記

表紙

今月の市民力



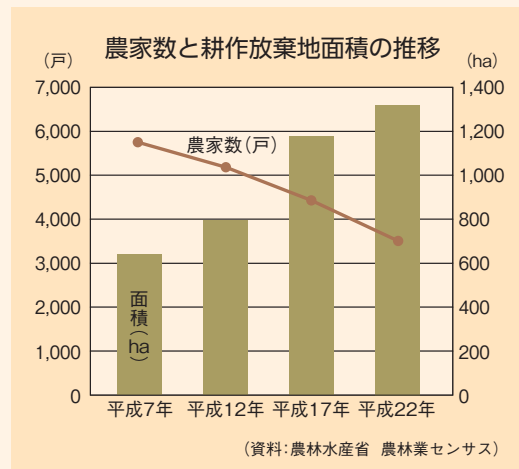
地域の農業・農村の振興のため、農業者の代表として活動する37人の農業委員。農業委員の業務を補助する補助員78人とともに、農地に関する相談対応をはじめ、食育活動や若手就農者のサポートなど、さまざまな活動に取り組んでいます。

遊休農地の解消を目指して取り組んでいる「一人一筆解消運動」は、地道ながら着実に成果を積み上げ、今では全国から多くの農業委員会が視察に訪れるほど、注目を浴びています。

遊休地を再生し、子どもたちと植えたサツマイモは大きく育ち、収穫を迎えました。地域に根差した活動の強化を図りながら、元気な地域農業を創ろうと、一丸となって活動を行っています。

Challenge 1

農地をよみがえらせる



耕作放棄地は農地の集積に支障をきたすだけでなく、周辺農地の病害虫の発生を助長したり、有害鳥獣のすみかになったりと、農業振興や住環境に悪影響を及ぼす

左の図で示すように農業者の減少や耕作放棄地の増

加が進んでいます。農業を取り巻く環境が深刻さを増す中、特に問題になっているのが、耕作放棄地の問題です。

6 ha、105筆。この数字は、市農業委員の取り組みによって平成25年度に遊休地を解消した田畑の面積です。



農業委員 成行満雄さん(73)

6 haの農地が再び輝く

Part 1
農地パトロールで
遊休地を解消



農業委員って どんな活動をしているの？

市では、選挙や市長の選任で選ばれた37人の農業委員が、地域農業の振興を図るため、次のような活動をしています。

- ・ 毎月の定例会で、農地の権利移動の許認可や農地転用の業務について審議
- ・ 農地の利用や権利関係の調整、あっせん
- ・ 認定農業者への農地の利用集積と経営改善支援
- ・ 農家からの相談
- ・ 農地パトロールの実施
- ・ 農業を通じた交流活動
- ・ 食育の推進



ことから、早急な対策の強化が求められています。平成25年4月「このままでは農業が衰退してしまふ」という危機感から、市農業委員会は状況の打開に向けた取り組みを開始しました。それが「一人一筆解消運動」です。その名の通り、農業委員一人ひとりが一年に一筆は遊休地を解消しようというものです。昨年度は目標を大きく上回

「農業委員会では、平成22年から定期的に農地パトロールを行い、遊休地がどの程度増えているか、有害鳥獣の出没状況などを確認してきました」と話すのは、遊休地の解消を目指し、市農業委員会の地区代表を務

信頼関係が
早期の問題解決に

る結果となりました。

市では、農業が基幹産業であるとの位置づけから、これまでにさまざまな農業施策の展開を図ってきました。しかし、国際化に伴う輸入農産物の増加、農家数の減少や農業従事者の高齢化、耕作放棄地や鳥獣被害の増加など、近年、農業情勢は厳しい状況にあります。そして、国が進める農業政策は環太平洋戦略的経済連携協定(TPP)への参加や価格維持を目的に続けられてきた生産調整の見直しなど、農業を取り巻く環境は大転換期を迎えようとしています。

そこで今月の特集は、増え続ける耕作放棄地を解消し、未来への橋渡しをしようとする人々、企業の農業参入、女性農業者、新規就農者など、形態を変えながら新しいカタチを模索し、農業の世界に新風を吹かせようとチャレンジする人々を紹介しします。

農業への

挑戦

—新しいカタチを切り拓く—

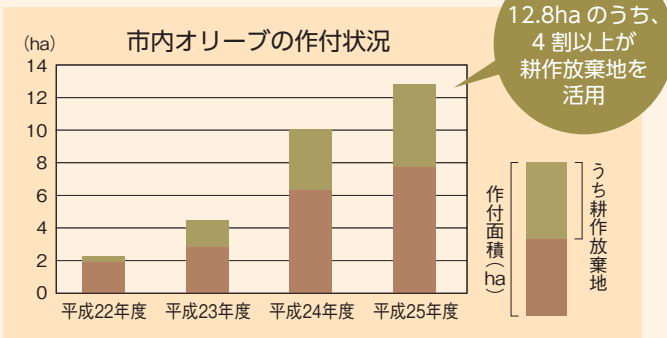


オリーブの作付け 市内で拡大中

香川の県花・県木として知られるオリーブ。香川県は、作付面積全国一を誇るオリーブの生産地です。オリーブといえば『小豆島』をイメージする人が多いと思いますが、現在、増え続ける耕作放棄地の再生を目的に、市内でもオリーブの栽培が広がりを見せています。

平成22年度に高瀬町と仁尾町でオリーブの作付けが始まりました。そして、小豆島でオリーブ栽培を行い、6次産業化にも取り組んでいる株式会社アイオリブが平成24年度に高瀬町に進出。耕作放棄地を再生し、オリーブ栽培を始めました。

Part 2 オリーブを使った 農地再生



次代を担う 子どもたちのために

平成25年10月、仁尾町オリーブ生産組合が収穫したオリーブを初めて出荷しま

遊休地の解消に向けた 農業委員「一人一筆解消運動」を追跡！



4 遊休地が解消！



2 農地を全筆確認した後、前年度の調査結果と比較し、農地の利用状況を把握



1 補助員と一緒に、担当区域内の農地を現地確認



3 遊休地は、農地の所有者などから話を聞く。所有者が管理できない場合は、近隣農家や担い手などにあてて

める成行満雄さん。
「8月から9月にかけては、補助員と一緒に全農地を対象とした一斉パトロールをしています。定期的なパトロールによって、農作業をしる農家の人と密接な関係になるんよ。それから、農業者の声を直接聞くことができるんです。それが農地の利用関係の調整をはじめ、農業全般にわたる問題の早期解決につながっていますね」

遊休地を使って 農業体験学習を実施

市農業委員会は、新たな試みとして、今年度から遊休地を活用した農業体験学習を始めました。これまでに小学生や園児らが参加し、サツマイモや三豊ナスなどを植えました。
「遊休農地を解消するとともに、子どもたちに食の大切さを知ってもらうことが狙いですね。
昔は学校から帰ると農作業の手伝いをしよったけど、



5月に高瀬町内で行われたサツマイモの苗植え体験。子どもたちは、高瀬地区の農業委員3人に植え方などを教えてもらいながら、楽しく苗を植えていきました



「農地を再生することで、農業体験を終えた農地は新たな借り手が見つかりやすくなるんよ。この取り組みは、担い手の規模拡大にもつながります」
農業の将来を見据えた活動は続きます。



した。
同組合は平成22年度に約700本のオリーブを植樹。現在では4.5ha、約2,900本まで作付けを拡大しています。



組合長 柴坂詔弘さん(73)

「仁尾はミカンやビワなどの栽培が盛んでしたが、高齢化や後継者不足などから、耕作放棄地の増加が目に見えて分かるようになりました。大切な農地を荒れ果てたまま、子や孫に渡すわけにはいかんですからね。何か別の作物に転換できかなと考えていました」と話すのは、組合長を務める柴坂詔弘さん。

「これまで作ってきた作物に比べて省力化が図れること、また健康志向が高まり国産オリーブの需要が増えていることから、オリ

ブを作ることに決めました」

若い人が参入しやすい 環境づくり

栽培は組合員を募り、グループで始めました。これにも狙いがありました。
「高齢化が進み、いくら労力が減ったとはいえ、個人で拡大するのは難しいです。グループですることによって、少しでも手伝ってくれる人が集まれば、大きな力になります。大勢やと輪に入りやすいじゃないですか。そして、若い人も参加してくれるかなと。そういう環境を作りたいんです」

ゼロからのスタート

オリーブの栽培は、全員が初めてのこと。これまでの苦労は計り知れませんが、「ほんまゼロからのスタートでした。普及センターの指導員から指導やアドバイスを受けたり、小豆島に





イモを中心にも多くの農作物を生産しています。

脱セオリーで挑戦を続ける

同社は、竹を堆肥に使った独自の土作りをしたり、砂地に適しているサツマイモを田んぼで作ったりと、これまでのセオリーとは違うことに挑戦しています。

「農業は自然が相手です。気候も温度も毎日違うし、毎年違う。だから農業も変わらんとね」

地域のブランドとなる商

品を作り出そうと、地元洋菓子店と連携し、スイーツを開発。県産の農林水産物を使ったビジネスプランを選ば「かがわ農林漁業成長産業化チャレンジコンペ2014」にて、農商工連携の先進的なモデルケースとして認定されました。

異業種のつながりが新しい発想を生む

平成23年12月には、みんなで地域の農業を盛り上げていこうと「研讃会」を発足。メンバーは、農業法人や肥料会社、流通業者などさまざまな業種の人で構成されています。機械の共有化による経費削減など、多くのメリットが生まれていると言います。

「一番は、知識と技術、つながりがプラスされたことですね。」

異業種が集まったからこそ、新しいアイデアが生まれています」

農地という資源が地域を潤す

大橋さんの今後の目標は、若手農業者の育成と地域農業の活性化です。

「農業の将来を見据えると、やはり若い農業者を増やしていくことが大切です。就農を目指す人に体験の場を提供するなど、就農の後押しをお手伝いできればと考えています。」

三豊には農地という資源がたくさんあります。その農地が産業になり、丹精込めて作った農作物が地域をPRしてくれるんです。今は卸売業者に農作物を買ってくださという身やけど、それが向こうから売ってくださいますと来られるように頑張っていきたいね。そうしたら、地域が潤います。農業が人を、そしてまちを動かすんです。おもしろいわあ」

Challenge 3

輝く女性農業者



農業の楽しさを子どもたちに

高品質栽培に取り組む横山千恵さん(41)

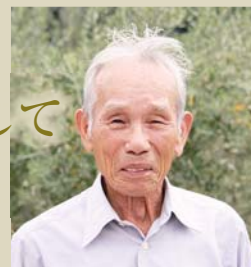
「夢は観光農園をすること。カフェや農業体験ができる場を設け、今の子どもたちに農業の楽しさを感じてもらいたいです」

夫の順一さんとイチゴを栽培する横山千恵さん。夫の就農をきっかけに、長年勤めた会社を退職し、日々栽培に励む女性農業者です。

「夫が就農したいと言いだした時は、生活していかるかどうか不安でした。でも夫の熱い情熱と懸命に頑張る姿勢を見て、一緒にしよう」と決意しました。

農地を貸して不安解消

西山 俊夫さん



仁尾町と言えばみかん。昔は山一帯がみかん畑でした。しかし、今は家のそばまで木が迫ってくるほど、耕作放棄地が増えました。私も年を重ね、作れる範囲が狭くなったこともあり、オリーブ生産組合に農地を貸しました。

おかげで、農地の管理の心配がなくなったし、隣の農家にも迷惑がからんようになったので、よかったです。

視察に行ったりと、より良い果実の生産に向けて、努力してきました。

でも、一番苦労したんは農地の整備やったね。若手農業者が中心になってやってくれましたけど、雑木などが生い茂る耕作放棄地を栽培できるように整地するんは、大変でした。耕作放棄地がきれいな農地になったのを見たときは、ほんと嬉しかったですね。

課題や失敗もたくさんあるけど、みんな力を合わせて頑張ってるよ」

みんなの力で農地は輝き

を取り戻しました。

生産だけでなく販売も携わる

仁尾町オリーブ生産組合は、収益増と継続性を高めるため、法人化を検討しています。

「法人化することで、責任感を持つてできますし、農地の貸し借りもスムーズになります。耕作放棄地を解消するためには必要だと考え、今年度中の法人化を目指しています。」

また、生産だけでなく販



出荷されたみずみずしいオリーブ

一つひとつ丁寧に収穫する組合員



売にも力を入れようと考えています。瓶やラベルのデザインを自分たちで考えて、差別化を図ろうと動いていますよ。商品はいろんな品評会に出展していき、評価を上げていければと考えています」

仁尾町オリーブ生産組合が初めて出荷したオリーブは286kg。三豊市で耕作放棄地から新しい農作物が誕生しました。

農業を第二の柱に



さんわ農夢株式会社取締役 大橋正幸さん(58)

「農業ってすごいよ。農産物が地域をPRして、活性化につながるんやから」と笑顔で話す、さんわ農夢株式会社の大橋正幸さん。平成23年4月に自らが代

表を務める建設業から農業に参入しました。公共事業が減少し、経営が不安定になったことから、新しい事業をしようと思ったのが、農業を始めたきっかけです。

「農業のノウハウも農地も農機具もないですよ。建設業の仕事が少ない時期の雇用対策として始めました。でも、そんな甘い考えではだめやったよ。生きた物を栽培しよるわけやもんね」

それでも、建設業で培った経営術で規模を拡大。遊休地を借りて、今では4.5haの農地で、サツマ

Challenge 2

建設業から農業へ



最初は分からないことだらけで大変でした。箱詰め作業では数箱詰めるのに何時間ものかかり、夜遅くまで作業をすることも。当時は子育てとの両立ができませんでした、つらかったことを覚えています」

それでも、おいしいイチゴを多くのの人に味わってもらいたいと、栽培技術の向上に努めてきました。

夫と分業し互いに切磋琢磨

農業者としての責任感がほしかったという千恵さん。今は6棟あるハウスを分け、夫と作業を分業しています。「葉を取り除く作業などの管理は別々です。夫の方が出来がいいと負けたくないという思いになり、いい刺激になっていますよ」



女性は視点で農業を盛り上げる

今年の7月、女性農業者のネットワーク強化を目的に「みとよ若嫁ファーム」が発足しました。「同世代の女性も増え、意見交換ができるようになりました。経営に役立つこともたくさんありますよ。今後は、農業イベントなどに参加し、三豊の農産物をPRしていく予定です」

夫の順一さんは「妻がこれからの農業を考えているとは嬉しい驚きですね。妻の助言で効率化が図れるなど、いい面がたくさんありました。互いに切磋琢磨しながらやっていきたいですね」と喜びを語ります。知識も経験もなく始めた千恵さん。女性の視点を生かし、三豊の農業を盛り上げようと目を輝かせています。



今年7月、女性農業者のネットワーク強化を目的に「みとよ若嫁ファーム」が発足しました。

女性の視点で農業を盛り上げる

Challenge 5

後継者を育て三豊に活気を



規模を拡大しながら若手農業者の育成にも力を入れる組橋聖司さん(34)

「私が子どもの頃に比べて、やはり耕作放棄地は増えましたね」と話す組橋さん。耕作

耕作放棄地で第二の主力作物を

この取り組みはすぐに効果を見せ、販路を拡大することができました。今ではインターネットを使った販売も行っています。

最初にしたこととは販路の開拓

仁尾町でみかんを中心に栽培している組橋聖司さん。平成19年から両親がしていたみかん栽培と一緒に始めました。

初めに力を入れたことは、栽培技術を学ぶことではなく、販路の開拓でした。「販売に重きを置きまして、自分で値を付けることで、経営の波を安定させることができるし、消費者の反応がストレートにかえってくるのがやりがいにもなるので、販路開拓に力を入れました」



Challenge 4

農業はじめました



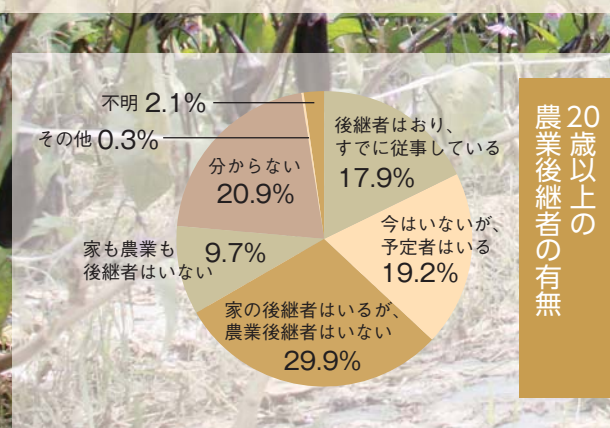
にまた一人、三豊の農業に新しい力が加わりました。

「後継者はいない」4割が回答

新しいことにチャレンジしたい

祖父母に代わり農業をしようと、勤めていた大阪の広告会社を退職し、三豊で農業を始めた松尾和也さん。「失敗してもいい、新しいことに挑戦しようという思いで農業を始めました」その後、一年半でナスを10a、ブロッコリーを

市内で平成18年度からこれまでに新規就農した人は93人。うち、就農時に40歳未満だった人は71人です。その一方で、後継者の有無に関するアンケート調査では、973戸の回答のうち、下の図で示すように約4割の農家が後継者はいないと回答。後継者不足は深刻さを増しています。そんな中、平成25年4月



新しい風を吹かせたいと日々励む松尾和也さん(33)

おもてなしの心が
新たにプラス

活動の様子はフェイスブ

発足から1年8
カ月が経過した今、
いろいろな変化が表
れていると事務局長の
岡子浩さんは言います。
「メンバー40人以外にも、
市内外から多くの人が勉強
会に参加したり、農業体験
に来たりしています。大学
生など若い人も多く来てく
れていますよ。」
地元農家の人は、農業に
注目しよる若者がおるって
いうことを知り、農業につ
いて教えられることを教え
られるうちに教えたいとい
う声が増えましたね」

若者の注目が
農家に
いい刺激を

情報を共有したりと、魅力
ある農業の実現に向けて、
地域全体で取り組んで
います。



三豊で採れた新鮮野菜に
舌鼓を打つツアー参加者

ックでも発信。農業者だけ
でなく、異業種に携わる人
とも交流を深めています。
そのつながりから、今年
の7月には旅行会社と香川
大学の学生が企画する日帰
りツアーが開催されました。
ツアーには県内から約20人
が参加。財田の農業を考え
る会はこのツアーに協力し、
市内の農産物を案内したり、
料理を振る舞ったりしまし
た。

「農産物の収穫体験や加

農家と学生がタッグを組んで
産直市を開きました

稲田 伊知郎さん(30)

**大学院生の
工夫を凝らした
活性化イベント**
三豊にはおいしい農作物
がたくさんあります。しか
し、地元の人々がそれに気付
いていないのも事実。そこ
で院生3人が中心となり、
地元の魅力を再発見しても
らう企画を考えました。
生産のプロである農業者
が消費者の声を聞くことで、

三豊自慢の農作物を多く
の人に知ってもらいたい、
生産者の所得の安定確保を
手助けしたい、そんな思い
から、香川大学大学院地域
マネジメント研究科の学生
が6月、市内で「学生市場」
を開催しました。
魅力あふれる農作物を広
く根付かせようと研究を重
ねる同研究科の稲田さんに
インタビューしました。



三豊の農産物を求め、たくさんの人が来場

モチベーションの向上や新
しい取り組みの発見につな
がればと、市場を開催する
ことにしました。
当日の来場者数はなんと
1,400人。たくさんの
人が来てくれて三豊のPR
ができただけでなく、地元
農家や飲食店のつながりも
増やすことができたかなと
感じています。
今後は市内だけでなく、
高松市でも開催したいと考
えています。県内の人に広
く知ってもらうことで、新
しい取引がそこから生まれ、
地域の活性化につながれば
と思います。



未来の農業者にノウハウを伝える組橋さん(左)

放棄地を借りて、農地を再
生し、規模を拡大すること
にしました。気候や土壌な
どを考え、その再生農地で
キウイを栽培。キウイは長
期にわたり販売できるとい
うこともあり、第二の主力
作物として経営の幅を広げ
ています。

ノウハウを教え
未来の担い手を増やす

平成25年からは、未来の
農業者を雇用し、ノウハウ
を教えています。最終目標
は雇用の独立だと言いま
す。

「うちですつと一
緒にやってくれたら、
とても助かるんです
よ。でもそれじゃ農
業は活気づかないで
すからね。やっぱり
新しい担い手が増え
ることで活性化する
んですよ」
その手助けをした
と考えている組橋
さん。
「独立は責任を背
負うことになります。
若い人にとっては特
にプレッシャーにな
るかもしれませんが、
いいプレッシャーだ
と思います。技術の
上達スピードも早く
なるし、何より農業
と真剣に向き合えま

すからね」
自らの経営だけでなく、
三豊の農業の明日を見つめ
て日々励んでいます。
**正解がないから
農業は面白い**
「農業は、毎年気候の変
動が激しいし、農地ごとに
条件も違うから、これって
いう正解がない業種です。
その正解がなくてマニユ
アル化できないところが一番
面白いところだと思います。
試行錯誤を重ねてやってき
たことが何かしらの形で反
映されます。作っている人
の色が出せるのが農業の魅
力ですね。
市内には、ほんと工夫し
ている人がたくさんいます
よね。つながりを増やして
情報交換し、そこから三豊
オリジナルの農業が生まれ
ていけばいいですね」
農業の面白さを感じ、伝
えながら、今に満足するこ
となくチャレンジする組橋
さん。農業発展に向けたア
プローチは続いています。

Challenge 6

農業は一人じゃない

元気なまちを
農業から

農業から地域全体が発展
してほしいとの思いから発
足した「財田の農業を考え
る会」。一人で農業と向き
合うのではなく、みんな
で農業設計をしていこうと取
り組むこの会は、特に若い
農業者にとって力強い味方
となっています。
毎月勉強会を開催し、悩
みや意見を出し合ったり、



三豊のPRに大学生も参加☆

かつて「瑞穂の国」と称えられていた日本。自然の恵みを受けた豊かな環境の中で、丹精込めて作られてきた農産物の品質と生産技術力の高さは、世界に誇れる財産です。

現在、農業を取り巻く環境は厳しくても、目を背けることなくきちんと向き合い、未来につなぎ守りたいとチャレンジを続ける人がいます。

今年の7月、廃校となった箱浦小学校の跡地に、野菜などを水耕栽培する植物工場が進出することが決定しました。これも未来へのチャレンジです。

地域農業が大きく変わるターニングポイントを迎えました。これは大きなチャンスの時でもあります。やり方に答えはありません。先人から受け継がれてきた知恵と経験が蓄積されている農業。それに新しい農業のカタチを切り拓くチャレンジ精神が加わり、田園都市三豊は輝きを増していきます。

インタビュー

「大好きな三豊を盛り上げたい」と農業を考える会に参加している大学生の三好さん

農業と地元を愛する気持ちがすごい！



三好 綾さん(21)

財田で育ち、小さい頃から農作業を手伝ってきました。今は大学に通いながら、兵庫県内のまちおこしにも参加しています。

日本の将来には農業と水産業が絶対に重要だと思い、今の農業者の本音や悩みを聞きたくて、参加するようになりました。「どっちゃこっちゃならんわ」ではなく、皆さん意見を出し合い、次のステップを一生懸命探している姿は、とてもすごいなと感じています。

食はおなかと人の心を豊かにしてくれます。それを支えるのが農業です。農業を通して、楽しく三豊を盛り上げていきたいです。

工品作り、三豊で採れた新鮮野菜を使った料理などを通して、三豊の農の魅力を堪能してもらいました。

今回のツアーで、私たちがおもてなしの心が新たに加わりましたよ！

農業は孤独ではない
つながりが大切

「農業って個のイメージが強いけど、一人じゃできないことはたくさんあると思います。いろんな人との

つながりからいろんな発想が生まれるし、何かのきっかけをつくってくれます。メンバーがたくさんいるんで、思いが異なることはあります。でも、それが奮起を促し、励みになるんですよ！

住みたいまち
帰ってきたい
まちに

「農業で地域を元気にしたいっていう熱い思いが、農業以外の分野にも伝わり、たくさんの若い人たちが動いてくれています。」

私たちの使命は、農業を魅力あるものにする。そして、それを次世代につなげることです。農業で三豊に住みたいまちに、帰ってきたいまちにしていきたいですね！

連携から新しい力を生み出そうと挑戦しています。



農業で地域を元気にしようと取り組む皆さん(下段右から2番目が堀江会長、4番目が図子事務局長)

農業に役立つ情報を
メールで配信開始

市では独自施策をはじめ、国や県が実施するセミナーや補助事業の募集など、農業に役立つ情報をメールで配信します。希望する人は、ぜひご登録ください。

【登録方法】

メールの件名欄に「メール配信希望」、本文欄に「氏名と住所」を入力し、次のアドレスに送信してください。

noushin@city.mitoyo.kagawa.jp

また、県でも病害虫の発生や気象・台風情報など緊急情報を配信しています。

希望する人は「配信申込み」を明記の上、メールを送信してください。

agrinet@pref.kagawa.lg.jp

メールやパソコンは苦手という人は、直接電話で農業振興課へご相談ください。

▼問い合わせ

農業振興課 ☎73・3040